

## レターズ編集委員長交代 ご挨拶 シン・分子研カルチャー

編集委員長を仰せつかり、本号より担当させていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

分子研レターズでは華々しい成果が紙面を飾ることもあれば、先達からのあたたかい叱咤激励も並びます。和気あいあいとした交歓の便りもあれば、いつでも科学の女神が微笑んでくれるわけではなく、中には涙の手記も載ることがあります。それも含めた岡崎での喜怒哀楽の通信記録が年2回発刊され、あと6年で100号に達します。

私が初めて手に取った分子研レターズは75号（2017年3月）で、主任研究員制度に関する記事に導かれて岡崎にやってきました。たまたま同じ号に前編集委員長の就任あいさつが掲載されています。その任を引き継ぐとは思いませんでした。

その「コミュニティとコミュニケーション」と題する山本先生のエッセイでは、分子研共同体の「思想」の共有の手段としての分子研レターズの役割が論じられています。さらに既刊のレターズを紐解いてくと、所内外の多くの方々によって、設立時から受け継がれている分子研の「あるべき姿」について熱く語られてきたことに改めて気づきました。その主題は科学の展開、独自の手法開発と装置共用、頭脳循環と国際化など多岐にわたり、どれも分子科学のcenter of excellenceたるべき矜持につながる重要なものです。前々編集委員長の小杉先生はこれらを「分子研カルチャー」と称されていました。「分子研と研究者をつなぐ分子研レターズ」は、表向きは「広報誌」という形を取りながら、実は分子研のスピリットを伝え、さらに分子研カルチャーをシン化させていく優れた装置なのでは、と考えています。「シン化」には様々な形態があります。進化であったり新化であったり、はたまた真化であったり深化であったり。

さて、先のエッセイではde Saint-Exupéryからの引用がありました。私もそれに倣ってLewis CarrollのThrough the Looking-Glass, and What Alice Found Thereから次の文章を引用しましょう。

*Now, here, you see, it takes all the running you can do, to keep in the same place.*

このハートの女王のセリフは、敵対的な関係にある種間の生存競争における有性生殖の利点という文脈で、種が生き残るために進化し続けなければならないことの比喩として引用されたことで知られています[L. Van Valen, Evolutionary Theory 1, 1 (1973)]。進化論におけるこの「赤の女王仮説」は科学・技術発展史にも当てはまります。技術革命と応用展開の春夏、収穫と技術的限界到達の秋冬というサイクルの中で、生き物である科学・技術が進化し続けるために、ニーズに応えながら絶えず生まれ変わることが求められています。

しかし個人的には、科学探求と計測基盤開発を研究力の競争関係の視点でとらえることに息苦しさを感じてきました。そんな中視聴したNHKの番組「超・進化論（2022.11）」は私自身の視座を大きく変えるきっかけとなった痛快な内容でした。進化論は奥が深く、進化論自身も進化しています。生物が種を超え、化学物質を使ってコミュニケーションを取り、互いに他を助け合いながら時には自食（オートファジー）しながら他を律している「共生」の様子が描かれていました。赤の女王は共同体とともに走り続けていた、というのがより正確な解釈のようです。孤独で走るよりもずっと楽しそうですね。まさにコミュニケーションが共同体を豊穡にしていくという自然の姿は、分子研の研究活動の展開にも通じるどころがあり、目からうろこでした。

とりとめのない文章になってしまいました。自分の専門から離れた分野との融合は往々にして障壁が高いのですが、「分子研レターズ」がその触媒となれば、と思います。「分子研レターズ」の編集を通して分子研の発展に少しでもお役に立てれば、と頑張っていきますので、紙面へのアイディア・ご意見・感想・ご希望など、どうぞお気軽にお寄せ下さい。

(松井 文彦 記)